史料

中世の道路交通（二）

——路邊に展開せる中世の諸相——

渡部英三郎

（鎌倉時代の卷）

△道路改良への努力
△道しるべ（示道標）

本號目次——

一、旅宿の情景
△發達の過程
△宿泊の制度
二、旅宿の遊女
三、道路と其附屬物
△道　路

一、旅宿の情景

○發達の過程

當時の旅人等が、往來に宿泊した宿驛にはどんな情景が展開してゐたであらうか。

宿驛に、旅宿が在つたことは、前に掲げられた旅日記に

よつても明かであつて、例へば「海道記」には、池田の宿に就いて、

時既に誰枯になれば、夜の宿をとひて池田の宿に泊る

と記し、萱津の宿に就いても

幽月影顯はれて、旅店に人定りぬれば、草枕を下めて

萱津の宿に泊りぬ。

と記してゐる。「夜の宿をとひて」と云ひまた「旅店」と記してゐるのは、確かに旅人を宿泊させることを渡世とし、または少くとも半ば渡世としてゐた者が、宿驛に在つたことを想見せしめるものである。然し旅宿といつても、江戸時代のやうに廣壯な屋舍と美事な調度と、暖い寢具と美味な食物とそして風致に富む庭園までを備へて、旅人の來着を待つといつたやうな種類の旅宿ではなく、其處には全く異つた粗野な世界が在つた。「海道記」の記者が、木瀬川の宿に泊つて「木瀬川の宿に泊て、萱屋の下に休す」と云ひ、蒲原の宿について「蒲原の宿に泊て、菅薦の上に伏せり」と記してゐるなどは鎌倉時代の初期頃に於ける旅宿が如何なるものであつたかを想像せしめるに充分である。それから十八、九年の歳月が流れて「東關紀行」の記者が同じ街道を旅した頃にも、まだ、東海道の旅宿には、目立つた發達が見られなかつた。彼が橋本の宿に一泊して

さても此の宿に、一夜とまりたりし宿あり。軒ふりたる藁屋の、ところ〳〵まばらなるひまより、月のかげ曇りなくさし入りたるをりしも、君どもあまた（君どもは遊女）見えし中に、すこしおとなびたるけはひにて、夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかにうち詠じたりしこそ、心にくゝおぼえしか

ことのはの浮きなさけは軒端もる

月の桂の色に見えにき

と記し、また興津に宿りて

興津といふ浦あり、海にむかひたる家にやどりて侍れば、いそべによする波の音も、身のうへにかゝるやうにおぼえて、夜もすがらいねられず（中略）こよひは、さらにまどろむ間だになかりつる草の枕のまろぶしなれば、寢

覺めともなき曉の空に出でぬ

と記しゐるなどは、何れもまだ「海道記」の記者が旅した頃と、旅宿が略〻同じ狀態に在つた面影を偲ばせるのである。更にまた駿河國車返しといふ里に泊つては、

ある家にやどりたれば、網、釣などいとなむ賤しき者のすみかにや、夜のやどり、ありかことにして、床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜半の旅寢もかくやありけむとおぼゆ

これぞこのつりする海士の筈びさし
いとふありかや袖にのこらん

と記してゐるが、恐らく此處は宿驛ではなく途中、行き暮れて旅宿もないので漁夫の家に一夜の宿を求めたものと思はれる。次に「十六夜日記」の記者阿佛は、清見關址に近い海邊の里に宿つて、

浦人のしわざにや、となりよりゆりかゝる煙の、いとむつかしきにほひなれば、夜の宿、なまぐさしといひける人のことばも、おもひ出でらる。

と書いてゐる。その他にも旅宿の同樣な面影を窺はせる記述は隨所に見出されるが、何處にも後世のやうに、設備の完備した旅宿を想見せしめるものはない。何れも「草枕をトめて」寢に就いたり「軒ふりたる藁屋」で、ところ〻から月光の漏れるやうな所であつたり、「菅屋の下」に休んだり、「菅薦の上」に伏したりするやうな、僅かに旅の一夜の雨露を凌ぐに過ぎない旅宿であつたのである。

これ等の旅宿が、既に農業や漁業などから、完全に分化して後世のやうに旅宿專門の營業として經營されてゐたかどうかは、現在の筆者には明かでないが、然し少くとも、漸次他の職業からの分化の過程にあつたことは「旅店」などいふ文字が見出されることによつても知られるであらう。恐らくは、それ以前から、交通量が增加して來るに隨つて、交通の要衝には自然に旅人の宿泊が多くなり、はじめは、山間や野中の村落などに在つては農家がそして海邊の村落に在つては漁家のあるものが、旅人等のために一夜の宿をかしたことであらう。それが月日の經つに隨つて次

第に營業化しつゝあつたであらう。鎌倉時代の旅宿は、特に繁華な地方を除きまだそうした分化の過程にあつたのではあるまいか。比較的繁華な土地では既に旅宿の經營が獨立の、または主たる職業として營まれるものもあつたらう。殊に商船などの往來航行する海邊や河口の宿などには、諸國の商人の滯在する場合も多かつたので、「問丸」が旅宿を營業として經營してゐたことが明かである（拙稿「中世末期港灣發達史物語」參照）。然し多くの宿驛に在つては、「東關紀行」の記者が車返の里に泊つた時の記事などに窺はれるやうに、農漁を本業とする宿驛の人々が傍ら旅人のために宿舍を提供してゐた者が多かつたではあるまいか。主要な街道から遠く離れた邊鄙な地方では、まだそうした半ば職業的な色彩を帶びた「旅宿さへなかつたであらう。武人の旅する場合などにも、路邊の民屋に一夜の宿を求めた。治承四年源頼朝が、石橋山の戰に破れて、房州へ逃れた時なども、屢々民屋に宿泊した。

今日、自二平北郡一赴二廣常居所一給・漸臨二昏黑一之間、止二宿于路次民屋一給之處、當國住人長狹六郎常伴、其志依二在二平家一、今夜擬レ襲二此御旅館一、而三浦次郎義澄爲二國郡案内者一、竊聞二彼用意一、遮襲レ之、暫雖二相戰一常伴敗北云云（吾妻鏡）

安房の豪族、長狹常伴が、平氏に心を寄せて頼朝を襲撃しようとしたのも其時であつた。次の日に、安西三郎景益が馳せ參じて、頼朝に謁したのもこの民屋に於いてゞあつた。鎌倉時代の初頭、まだ鎌倉の勢力外に獨立して一王國を成してゐた陸奥の藤原秀衡の勢圏に於いても、種々交通の施設が講ぜられてゐたことは、次に述べる通りであるが、文治五年秀衡が、觀自在王院を慶した時、其南門に新たに「並宿」を造り、其の西南地に、數十宇の車宿を建築した。（驛遞志稿）「並宿」が如何なる種類の建物であつたかは明かでないが、「車宿」は恐らくは旅館の種類であつたらうと一般に推察せられてゐる。（同上）但し若しそれが旅宿の種類であつたとしても、街道筋に發達した「宿」または「旅店」などゝは趣きを異にしたであらう。奥羽十七郡（其村數約

一萬あつたといふ「吾妻鏡」）の支配者であつた秀衡の本據、平泉には屢々各地の諸豪族が參集したであらう。――恰ど鎌倉には鎌倉の支配下に在る豪族等が參集したやうに――「車宿」はそうした人々の平泉滯在中の宿舍にでも充てられたものであらうか。それともまた奥州は金の產地で、諸國商人の入り込む機會が多かつたので、彼等を誘致して京都の光明を吸收したり、商業を盛んにして平泉の繁榮を計るために、そうした施設が設けられたものであらうか。これ等のことに就いては斷定すべき資料が全くなく、たゞ想像が許されるばかりである。

○宿泊の制度

それは兎も角、街道筋に自然に發達した旅宿に、旅人等は如何なる方法で宿泊したであらうか。

遠い昔、養老舍は、私に行旅する者の宿泊に就いて「凡五位以上の私行する者、驛に投じて止宿せんと欲する者皆之を聽す。若し邊遠の地及村里なき所は初位以上及勳位も亦之を聽す。共に輒く其供給を受くるを得ず」（令義解）と規定してゐるが、これによれば上代の驛舍は全く官吏の往還のために設けられたものであつて、私に旅行する者は其處に宿泊することを許さゞるを原則としてゐる。たゞ五位以上の者に就いてのみ宿泊が許され、邊遠の地方であるか、または附近に村里のない場合にのめ初位以上及勳位の者にもそれが許されたのである。一般人の旅行には、驛舍は全く無緣の存在であつた。隨つて平民の旅行者は、村里の農家に一夜の宿を求めたり、野山に伏したりして、旅を續けるより他に方法がなかつたであらう。「驛遞志稿」は、「武家事記」「宇治拾遺」「六部叢書」「柳菴雜草」等の記述を引用して、往時（主として中世末期に關して）の旅行者の宿泊の有樣を次のやうに傳へてゐる。

按ずるに「武家事記」に古來旅客傳舍に投ずれば、皆自其飯を炊て之を食ひ舍長は、唯其秣芻を辨ずるのみ。故に昔日馬槽を以て旅舍の招標と爲す。時俗其家を稱して馬駄餉（はたご）と云ひ、後世轉じて、旅籠屋と云ふ。又源順が「和名抄」に筥の字を「ハタゴ」と訓し、又「宇治拾遺」

に「ハタゴ」馬あるものは其一例なり。

又「六部叢書」に、元龜初年の頃は、旅人出ずるに臨て、必ず米一升錢三百文を懐にし、炙飯、醃蘿蔔等を携しと云ふ。

又「柳菴雜草」に、慶長初年の頃は、旅人一日の粮食を糒二合五勺とし、十日を行くものは則二升五合を携へ旅舍は唯之を淹すための溫湯及臥榻を給するのみ。故に其は宿籌の凡例に於て、炙褥は豫報あらざれば借さず。淹糒は勉めて膨亨に至らしめず等の言を記せり。

「註」――「糒」は飯を干したもの。「臥榻」はこしかけ寢臺等の意味。「炙飯」は燒き飯、即ち米を燒いたものであらう。「醃蘿蔔」は鹽漬けにした大根、蘿も蔔も大根の一種と辭書にある。

それ等の文獻によれば中世の末期から近世の黎明頃にかけてさへ、旅行者は炙飯や糒を携帶し、副食物としては大根や菜の類を鹽漬けにしたものを携行したといふのであるから、そして旅宿は炙飯や糒を淹す溫湯を供するに過ぎなかつたといふから、鎌倉時代の旅日記に現はれてゐる旅宿も、後世のやうに、原則として食事を取扱つたものでないことは容易に想像されるであらう。然し錢も持參したといふから旅人が望むかまた特殊の場合には、食物を提供することも絶無ではなかつたであらう。また寢具も、豫めその借用を通知して置くのでなければ用意されてなかつた。それを用意して置くやうに、次の旅宿に通知して置くことが、一般に行はれてゐたものとは考へられないから、恐らくは貴人か富者が旅行する場合などを除いては、皆着のみ着ままゝで旅宿の寢床に横臥して疲勞を休め空腹を癒やしたことであらう。「東關紀行」の記者が興津に泊つて「夜もすがらいねられず（中略）さらにまどろむ間だになかりつる……」と云つてゐるのも、そうした旅宿であつたものと思はれる。また馬のために秣糧を供することが、旅宿の主要な役割の一つであつたといふのは、當時の道路交通に馬が多く用ひられたことを示すものである。殊に武人の往還には馬が用ひられ、彼等が集團を成して通過するやうな場

合が少くなかつたから、秣糧の供給は旅宿として、重要な仕事であつたらう。

然し貴人が多くの從臣を引具して、旅行するやうな場合には、斯うした旅宿は、まだ江戸時代の「本陣」のやうにこの大規模な旅行者群の需要に應ずるだけの發達を遂げてゐなかつたから、豫めそれに對する準備をして置かなければならなかつた。例へば建久元年頼朝が群臣を率ゐて上洛した時には、隨兵に關する事項の奉行を和田義盛、梶原景時に命じ、物具のことを三浦義連に、雜色以下下部の事を梶原景季等に、公家その他への贈物のことを掃部頭親能に命ずると共に、厩のこと（馬匹及びそれに對する途中の供給）を八田知家、千葉胤信に命じ旅宿の奉行を葛西清重に、六波羅に於ける亭（旅館）のことは兼ねて掃部頭親能に命じた。斯うした場合、途中に於ける旅宿には其處に領土を有つ家人やまたは莊園の所有者等の居宅などが、恐らくは充てられたであらう。また糧秣については豫め、沿道に命じて用意せしめられたであらう。その後に於ける將軍の京都往還などにも、同じやうな方法が講ぜられたのである。（吾妻鏡に據る）

要するに鎌倉時代に於いては、旅宿は既に宿驛々々に發達しかけてゐたが、それはまだ江戸時代の旅宿などのやうに、高度の發達を遂げてはゐなかつた。前に掲げた諸文獻によつて知られるやうに一般には、食物を携行して辿り着いた旅人等のために、食器や渇を供したり馬の糧秣を供したり、僅かに一夜の雨露を凌ぐごろ寢の寢床を供したりするに過ぎなかつたものと考へられる。

二、旅宿と女

遠い昔から旅宿に女はつきものであつた。旅宿の女に就いては前稿「江戸時代の道路を往く」や「江戸時代旅宿物語」等に於いても書いたが旅宿の女は決して江戸時代の特産物ではなかつたのである。

旅する者の好奇的な心情は、まづ行く先々の若い女に注がれた。上代に在つて國司の往還する場合などには、土地の豪族や驛吏等などの中にその子女を、國司の枕邊に侍せしむることに、誤れる榮譽を感じたり、功利的な意圖を藏

したりする者が少くなかつた。それから後、中央から派遣される武將なども、同じやうに宿泊した土地の豪族等によつてそうした接待を受ける場合が少くなかつた。やがて、旅行する者が多くなつて來ると、その一般的な慾求に對應して、宿泊者の多い土地の旅宿には、特殊な女の群が發生して來たのである。平安朝末期近い頃、淀川の沿岸に在つて當時近畿舟路の要衝に當つてゐた江口などに、如何に多くの、旅宿の女が巣喰つて、なまめかしい情景を醸してゐたかは「遊女記」の記述によつても明かであるが、それは獨り江口やその他淀川附近の繁華な土地に於いてばかりではなかつた。驚くできことには、前に引用したやうに、非常な不便な道路交通の事態を偲ばせてゐる「更科日記」にさへ、遊女が姿を現はして來るのである。足柄山の麓の宿に泊つた時彼女等の目の前に現はれた遊女の面影を回顧して、日記の記者は次のやうに記してゐる。

足柄山といふは、四、五日かねて恐ろしげに暗がりわたれり。やう〳〵入り立つ麓の程だに、空のけしき、はかばかしくも見えず、えもいはず茂りわたりて、いと恐ろしげなり。麓に宿りたるに、月もなく暗き夜の、闇にまどふやうなるに、遊女三人、いづくよりともなく出で來たり。五十ばかりなる一人、二十ばかりなる、十四五なるとあり。庵の前に傘をさゝせてすゑたり。をのこども、火をともして見れば、昔、こはたといひけむが孫といふ。髪いと長く、額(ひたひ)いとよくかかりて、色白く穢げなくて、さてもありぬべき下仕などにてもありぬべしなど、人々あはれがるに、聲すべて似るものなく、空に澄み昇りて、めでたく謠をうたふ。(中略)見る目のいと穢げなきに、聲さへ似たるものなく歌ひて、さばかり恐ろしげなる山中に立ちて行くを、人々飽かず思ひて皆泣く。幼き心地には、まして此のやどりを立たむ事さへ飽かず覺ゆ。

其處ばかりではなかつた。墨俣の渡船場附近などにも同じ種類の女が居た。

美濃の國になる境に、墨俣といふ渡(わたり)して、野がみとい

ふ處に着きぬ。そこに遊女ども出で來て、夜ひと夜、歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、あはれに戀しきこと限りなし。（更科日記）

斯種の女等は、如何なる境遇が產んだ人々であつたであらうか。遊女の群を產んだ世情は既に夙く上代の歷史の裡に窺はれる。孝德天皇の大化元年詔して、

其れ臣連等、伴造、國造、各己が民を置きて、恣情に駈使ふ。又國縣の山海林野池田を割りて、以て己が財と爲て、爭ひ戰ふこと已まず。或は數萬頃の田を兼ね併せ或は全く容針少地も無し、調賦を進る時に及びては、其の臣連、伴造等自ら收斂めて、然る後に分ち進め、宮殿を修治め、園陵を造るに、各己が民を率ゐて、事に隨ひて作る。（中略）方今百姓猶乏し。而るを勢有る者、水陸を分割きて私地と爲し、百姓に賣り與へて年に其の價を索ふ。今より以後地を賣ることを得じ。みだりに主と作りて劣弱を兼ね併すること勿れ。

と仰せられた。然し大化改新によつて郡縣制度が樹立せられてからも、右の形勢は阻止せられるに至らず歲月の經過と共に、進展する一方であつたのである。殊に平安朝中葉頃から國司が任地に在つて地方の豪族化し、國政を怠つて私利を追ふやうな傾向が一般的になつてからは、農民の貧困は益々甚しくなつて來た。かくて彼等の中には他國に逃竄して一時の難を避けたり、國衙の地から逃れて庄園の民となつたり、流浪して不逞を行ふ徒となつたりする者が多かつたが、旅人の前に現はれて媚を賣り歌曲を演じて日を送つてゐた女の群はかゝる世態と密接な關係がなければならない。

かくして平安朝末期の頃には、船舶の出入の多い港津や、交通の要衝に當る宿驛などには一般に、遊女の群が生じてゐた。源範頼は、父の義朝と池田宿の遊女との間に生れた（源平盛衰記）といふし、その範頼が後日、平氏追討の大將軍として西國に向つた時などにも、室津あたりの遊女に溺惑して諸將に顰蹙させたといふ（同上）から遊女の存在は鎌倉時代以前から可なり一般的現象になつてゐたものと

思はれる。

鎌倉時代になつてからも、遊女の存在は益々一般的になつて行つたやうである。「海道記」の記者は、赤坂の宿を過ぎて、

九日、矢矯を立て赤坂の宿を過ぐ。昔此宿の遊君、花齢、春こまやかに、蘭質秋かうはしき者あり（中略）

如何にして現の道を契らまし
夢驚かう君なかりせば

と詠じてゐるし、足柄山を超えて關下宿に於いても遊女を見て、

窓に歌ふ君女は、客を留めて夫とす。憐むべし、千年の契を旅宿一夜の夢に結び、生涯の樂しみを往還諸人の望にかく。翠帖紅閨、萬事の禮法異なりと雖も、草庵柴戸、一生の觀遊是おなじ。

櫻とて花めく山の谷ほこり
をのが匂も春は一時

と觀じてゐる。また「東關紀行」の記者も「海道記」の記者と同じく矢矧で、遊女の姿を見て斷ち切れぬ愛慾の情に苦しむ人々の心に溫い涙を注いだのであつた。

赤坂といふ宿あり、こゝにありける女ゆゑに、大江定基が家を出でけるも、あはれに思ひいでられて、過ぎがたし。人の發心する道、その緣一つにあらねども、あかぬ別れを惜しみし、迷の心をしもしるべとし、誠の道におもむきけん。ありがたくおぼゆ。

別れ路にしげりもはてじ葛の葉の
いかでかあらぬかたにかへりし（東關紀行）

斯くした遊女の群は、當時前に述べた鎌倉京都間の著名な宿驛や、その他の主要な諸街道の宿驛や主要な港津などの多くに在つたであらう。(1)

「註」(1) 鎌倉時代から文獻に見える主なる港津としては大津坂本（近江）淀（山城）禁野（河内）神崎、尼崎、兵庫、渡邊、一州（攝津）福泊（播磨）尾道（備後）佐東河（安藝）竈土、伊賀地（周防）赤間（長門）門司（豐前）三國湊（越前）敦賀（越前）神崎（下總）等（德田釼一氏「中世に於ける水運の發達」中より）が擧げられてゐる。これ等の諸港津の凡てに遊

女が居たかどうかは明かでないがこれ等の港津によつて表徴せられてゐる當時の水運の發達は、陸上交通の發達の上に大きな影響を及ぼしたことに、注目すべきである。

路邊の遊女が、鎌倉時代に於いて一般的な、根強き存在にまでなつてゐたことは、彼女等が將軍に對してさへ、堂々と訴訟などしたことによつても知られる。文治三年三月二十五日、賴朝が三浦義澄の亭に行つて遊興した時のこと、其頃信濃國保科宿の遊女の長者が訴訟のことがあつて、鎌倉へ來てゐたので、賴朝は彼女を召して郢曲を聞いたのであつた。

廿五日、丁酉、二品渡二御三浦介義澄亭一、有二御酒宴一、折節信濃國保科宿遊女長者、依二訴訟事一參住、召二出其砌一、聞二食郢曲一云々（吾妻鏡）

訴訟の內容に就いては知るべき由もないが信濃の遊女が鎌倉へ來て將軍に訴訟するといふからには、餘程重大な利害が在つたからであらう。鎌倉末期の頃にも遊女が土地の住民と共に、地頭等の橫暴を訴へて、訴訟に參加した記事が見出される。その他にも遊女に關する記事は「吾妻鏡」などに頻繁に見出される。建久四年の五月賴朝が富士の裾野で卷狩を行つた時にも、手越、黃瀨河などの宿驛から遊女を集めて酒宴を催したのであつた。

十五日（中略）今日者依レ爲二齊日一、無二御狩一、終日御酒宴也、手越黃瀨川已下近邊遊女全二群參一、列二候御前一而召二里見冠者義成一、向後可レ爲二遊君別當一、只今卽彼等群集頗物忿也。相二卒于傍一、撰二置藝能者一、可レ隨レ召之由、被二仰付一、云々其後遊女事等至二訴論一、義成一向執二申之一云々

その附近の驛々に遊女が居た有樣が窺はれる。その機會に里見義成が遊女の取締を命ぜられそれ以來遊女の訴訟等は凡て義成が取扱つたといふのであるが、當時の遊女がコソ〳〵と密かに媚を賣るやうな類の者ではなく、公然と貴人の面前にも姿を現はし、時によつては、その利益のために堂々と訴論さへする女の群であつたことが知られる。同じ月の二十八日夜曾我兄弟が親の仇工藤祐經を、狩屋に襲擊した時にも、其處に遊女が姿を現はした。

爰祐經、王藤内等所レ令二交會一之遊女、手越少將黄瀬河之龜鶴等叫喚、此上祐成兄弟討二父敵一之由、發二高聲

（吾妻鏡）

曾我兄弟が祐經の首を切つた時眞先きに叫び喚いたのは手越宿の遊女少將と黄瀬河の遊女龜鶴の二人であつた。また建仁元年の六月、若き二代將軍頼家が大磯に一泊した時其處にも美しい遊女が居た。

左金吾（頼家）御二參江島明神一以二此次一、令レ追二遙相模河邊一給、當國御家人群參、有二狩獵射的之勝遊一、今夜到大磯一令二止宿一俗、召二遊君等一、被レ二盡歐曲一（吾妻鏡）

翌朝頼家が大磯の宿を出發しようとした時一つの事件が起きた。それは小雨が降り灑ぐ朝であつたといふが、遊女の一人愛壽といふが俄かに落飾して了つた。稀れに見る美しい女であつたが、昨夜獨り頼家の宴席に招がれなかつたのを恨んだのであつたといふ。彼女が將軍の召しに洩れたのは、同僚が彼女の美貌を妬みその存在を頼家の從者に知らせなかつたがためであつた。出發の間際に彼女の落髪を知つた頼家は深く歎息し、その心情を憐んで厚く賜與したが彼女はそれを高麗寺佛陀に施入して姿を消して了つた。

（吾妻鏡建仁元年七月二日の條に據る）

斯樣に、宿驛に於ける遊女の存在は、驚くほど一般的であつた。彼女等が如何なる出身の者であつたかは明かでないが、何れ當時盛んに横行してゐた人買商人の存在（後之參照）など〻、關聯を有つ惠まれぬ境遇の人々であつたらう。然しこれ等の記述を通じて何處やらに、氣品や優雅の面影の偲ばれるところ、その悉くが貧農の娘などのみであつたとは思はれない。

鎌倉時代の交通が旅宿や路邊の情況や其の他の事情などから考へ、江戸時代など〻は比較にならぬほど低い發達の階程に在つたことが明かであるに拘らず、斯樣に、宿驛や港津などに於ける遊女の存在が、一般的であつたとすれば、其處には彼女等を生み出す社會的經濟的な事態を想見し且つ旅行者にとつて彼女等が如何に根强き慾求の對象であつたかを想見しなければならないであらう。

三、道路とその附屬物

○道路

平安朝末葉の頃から中央政權が衰微し、地方行政が弛緩して、國司はたゞ私利を貪るに忙しかつた。「今昔物語」[1]などには恐らくは民衆の利福などゝは緣の遠かつたであらう國司の姿がまざ〳〵と描かれてゐる。

「註」(1) 平安朝末期頃の著と推定されてゐるが著者不明。相當高い身分から出身した有識の僧侶などであつたかと考へられてゐる。

長い間、そうした事態のまゝ放置されてあつた時代の後を承けたのであるから、鎌倉時代の道路ははじめから決して良好な狀態にはなかつたであらう。然し幕府がその初頭から屢々驛制を整ひ、また一部の地方では道路の開設なども行つてゐるから、道路交通の發達に對して相當の努力を拂つたことは明かである。鎌倉幕府の主腦部には民政に周到な注意を拂つた人々が少くなかつたからその後の時代にも屢々交通施設の整備に努力が續けられたであらう。然し

それにも拘らず、その主要幹線であつた東海道などにしても、決して江戸時代の道路[1]などのやうに良好な狀態にはなかつたものの如くである。

「註」(1) 拙稿「江戸時代道路及道路附屬物史物語」參照

建治年間に、「十六夜日記」の記者、阿佛が東海道を旅した頃にも、旅人等は粗惡な道路に行旅の困難を感じた有樣が窺はれる。彼女が美濃國・不破關址の邊りを過ぎたのは、雨の降りしきる日であつたが、道路の面影を次のやうに傳へてゐる。

關よりかきくらしつる雨、時雨にすぎて、ふりくらせば、みち（道）もいとあしくて、心よりほかに笠縫のむまやといふ所にとどまる。

たび人はみのうちはらひ夕ぐれの
雨にやどかるかさぬひのさと

次の日も雨であつたが、路面に水が湛へられ歩行は全く困難な狀態であつた。

十九日、又こゝをいでゝ行く。よもすがらふりつる雨

に、平野とかやといふほど、みち（道）いと悪くて、人のかようべくもあらねば、水田の面をぞ、さながらにわたりゆく。あくるまゝに、雨はふらずなりぬ。

さながら水田の中を歩いてゆくやうであつたといふのである。尾張國、下戸（おりと）のむやまを立ち出で、海邊近くになつては、彼女は道路を歩かずに、干潟（ひがた）を歩いたといふが、それも道路が悪くて歩行に困難であつて、干潟の方が安易に歩くことが出來たからであらう。

しほひのほどなれば、さはりなく、ひがたを行く。をりしも、濱千鳥おほくさきだちて行くも、しるべがほなる心ちして、

濱千鳥なきてぞさそう世の中に
跡とめじとは思はざりしも

また箱根の山路にかゝりては（當時は足柄路から箱根路へ街道が移りつゝあつたやうだ）

いとさかしき山をくだる。人のあしも、とゞまりがたし。湯坂とぞいふなる。からうじてこえはてたれば、ふもとに早河といふ河あり。まととにいとはやし。木のおほくながるゝを、いかにと問へば、あまのもしほ木を浦へ出さむとてながすなりといふ。

記し、嶮岨な道路を偲ばせてゐる。「十六夜日記」には、雨の日の道路と山道の狀態が描かれてゐるだけで、その他の場面は現はれてゐない。然し江戸時代（元祿）の道路に就いて、同じ東海道を旅したケンペエルが（ケンペケルその他の外國旅行者については「江戸時代の道路を往く」其他參照）

雨水に備へるためには、低き平野の方に、便利なる排水を作り、また高く盛り上げたる美しき土堤を以て、雨に嵩增す水（河水）を防ぐが故に（ケンペエル參府記）

と記してゐるのと比較すると、二つの時代に於ける道路構造の著しい相異が明かに窺はれるのである。また山路に就いても江戸時代の末期に東海道を旅したシーボルトが、

山嶽にして崖嶮はしく、街道を作ること出來ざる所には梯の道（石段？）を作り、其段々を低く而かも弘くして荷動物又は人夫で、安らかに上り降り出來るやうにす（シーボルト江戸參府記）

と記してゐるのと比較すると、當時は全く路面の工事が施されず、たゞ行き通ふ人々によつて蹈み固められたまゝの自然道路であつた有樣が想見せられるのである。尤も建治年間は、元軍が來襲して、日本全土を震撼し、幕府が全力を擧げて國防のことに當つた直後であつて、東海道の道路などを顧たりする餘裕がなかつたには相違ないが。

箱根山路の面影は「東關紀行」の記者によつても描かれてゐる。

猶ゆきすぐるほどに、箱根の山にもつきにけり。岩がね、たかくかさなりて、駒もなづむばかりなり。山のなかにいたりて水うみ廣くたゝへりたり。

路面に岩石が重り續いて、駒の歩みさへ容易でなかつたといふのである。また宇津の山路にも、つたかへでなど茂つて、荒廢の影が漂つてゐた。小夜の中山邊りにも、行き易い坦々とした道路が通つてゐたらしい有樣は偲ばれない。

小夜の中山は、古今集の歌に、よこぼりふせるとよまれたれば、名高き名所なりとは聞きおきたれど、見るにいよ〳〵心ぼそし、北は深山にて、松杉。嵐はげしく、南は野山にて、秋の花、露しげし。谷より嶺にうつる道、雲にわけ入る心地して、鹿の音なみだをもよほし、蟲のうらみ、あはれふかし。

要するに、鎌倉時代の東海道の道路は、江戸時代の道路などのやうに、路面に砂礫を敷き入れたり排水の設備を設けたり、河水の侵入を防止するための土堤が築設されたりして、種々の工事が施されたものではなく。自然のまゝの道路であつたのである。「海道記」が「野徑の道芝、露ことに深し」と記してゐるなどによつても窺はれるやうに、恐らくは路面にも、草さへ繁茂してゐたであらうと思はれる。この旅行記の記者も、尾張の熱田を過ぎて海邊へ出ると、道路を通らずに干潟に馬を乘入れて急いだと記してゐるが、草が繁つたり凹凸の多かつたりする道路よりも、干潟の方が安易に行かれたからであらう。

此浦を遙かに過ぐれば、朝には入鹽にて、魚に非ずは游くべからず。晝は鹽干潟、馬をはやめて急行く。（海道記）

此の時代に道路が嶮悪であつた有様は、他の諸文献にも散見してゐる。頼朝が石橋山の旗擧げを決行した時、三浦の一族が頼朝に心を寄せながら遲參して戰に參加することの出來なかつた事情を説明して「吾妻鏡」は「三浦介義明一族已下、兼日雖レ有二進レ奉輩一、于今遲參、是或隔二海路一兮凌二風波一、或避二遠路一兮泥二艱難一之故也」と記し、また頼朝が、石橋山に敗れ、安房に逃れた後、再擧して關東一圓を風靡した頃、甲斐源氏の一族は神野及び春田路を經て、頼朝の軍に參加しようとして進軍中、これを征討すべく甲斐路に向つた駿河の目代と途中で遭遇して會戰したが、これに關し「吾妻鏡」は駿河から甲斐へ通ずる道路の狀態について次のやうに記してゐる。

境連二山峯一、道峙二磐石一、不レ之間、不レ得レ進二於前一、不レ得レ退二於後一

これ等の記述によつても、その片鱗が窺はれるやうに、道路はまだ一般的には殆ど工事などが施されず、特殊の地方を除き、僅かに人馬の通ひ得るに過ぎない狀態に在つたものと思はれるのである。

○道路改良への努力

然し、頼朝が天下を統一して、政權を掌握するに至ると共に、やがて道路及び驛制にも注意が拂はれて來た。そして鎌倉附近などに在つては、屢々道路の改修工事が行はれて來た。由比濱には船舶の出入があり、西國から鎌倉へ輸送せられる貨物は主としてこの附近に陸揚げせられたから、鎌倉から由比濱邊に通ずる道路は、痛切にその必要が感ぜられてゐたものと見え、入府後間もなく、頼朝はこの道路の改修を行つた。それに就いて「吾妻鏡」は次のやうにしてゐる。

十五日（壽永元年三月）乙酉、自二鶴岡社頭一至二由比浦一、直二曲横一而造二詣往道一、是日來雖レ爲二御素願一、自然渉レ日、而依二御臺所御懷孕御祈一故、被レ始二此儀一也。武衞（頼朝）手自令レ沙二汰之一殆、仍北條殿以下、各被レ運二土石一云々

此の時、工事は頼朝自身によつて指揮せられ、北條時政等以下の諸將が自から人夫を指圖して土石を運搬した。剛

健粗野な鎌倉武士の面影が偲ばれて興味深い。鶴岡社頭から由比浦の港へ、大道路を開設することは頼朝のかねてからの企圖であつたが、政子の懷孕を祈願するために、此日に式典を擧げ工事を起し屈曲を除き、直線の大路を開設したのである。恐らくは、由比浦と鎌倉との間に、既に相當多量の貨物の運搬があり、それがために大道路の開通が必要であつたに相違ない。鎌倉の街の中には、大路、横路の幾條が開けてゐたことであらう。元治元年五月、捕虜の宗盛父子が鎌倉へ入つた時の光景を記した「吾妻鏡」の記述の裡に、そうした有樣が窺はれる。

十六日（中略）今日前內府（宗盛）入二鎌倉、觀者如二堵墻一、內府用レ輿、金吾乘レ馬（中略）經二若宮大路一至二横大路一暫留レ輿（下略）

義經が、鎌倉に漲つてゐる反義經的空氣もよく知らずに、平氏追討の勳功を頼朝から賞せられることを豫期しながら、宗盛父子を護送して酒勾驛までやつて來た（後には腰越まで來た）のは、そして鎌倉からの急使によつて、鎌倉參入を差し止められ、捕虜を北條時政の手に渡してしまつたのは、その前日のことであつたのだ。その後も、鎌倉府內の道路開設または改修には力が注がれた。面白いことには、諸將に何か懈怠や不正等があると、彼等はその罪を償ふ爲に屢々私費を以つて道路工事を命ぜられた。例へば、文治四年六月宿將八田知家も郎黨の勤務懈怠に因つて、府內の道路工事を命ぜられた。

八田右衞門尉知家郎從庄司太郎、被レ遣二大內夜行番一之處、懈緩之由依レ令二風聞一、早可レ召二進其身於使廳一之趣、今日被レ仰二遣定綱一、此上可レ造二鎌倉中道路一之旨、被レ仰二知家一云々（吾妻鏡）

また文治三年三月、權臣梶原景時も、土佐國の住人夜須七郎行宗を讒訴した科により鎌倉の道路工事を命ぜられた。

景時依二讒訴之科一可レ作二鎌倉中道路一云々　俊兼奉二行之一（吾妻鏡）

まさか、其時の道路の出來榮えが良く、道路工事監督の

手腕を認められた譯でもあるまいが、後建久五年四月、景時は今度は奉行として鎌倉府内の道路の改修に當つたことがある。

十日、辛丑、被レ造二鎌倉中道路一、梶原景時奉二行之一

（吾妻鏡）

源氏が亡びて、北條氏が鎌倉幕府の實權を掌握してから後も、鎌倉附近の道路網完成工作は續いて行はれた。府内の朝比奈切通を開き六浦庄金澤（其處は鎌倉時代に上總地方との間に交通のあつた港）へ通ずる道路が開通されたのは仁治元年、泰時が執權の時であつた。それまで、鎌倉から六浦庄へ出るには嶮はしい山路を越えなければならなかつたが、鎌倉と上總方面との交通が盛んになるに隨つて、道路改良の必要が生じたものであらう。この道路を改修すべきことの評議があつて、繩を曳き、丈尺を打つて、諸將等に受持區域を分擔せしむべきことが決定したのは、仁治元年の十一月晦日であつた。愈々改修の工事が起されたのは翌仁治二年四月五日のことで泰時自から工事を監し、家人等が群衆して、土石を運搬した（吾妻鏡に據る）といふから、當時としては相當の大工事であつたに相違ない。

これ等の記述は、何れも鎌倉府内及びその附近の道路に關するものである。然し他の地方に於いても幕府の道路改良に關する努力が全く拂はれない譯ではなかつたであらうが、たゞそれに關する明かな記述を、現在の筆者には、まだ見出し得ないのである。

○道しるべ

鎌倉時代の舊道には、示道標が見受けられる。例へば、千葉縣君津郡地方に遺存してゐる「鎌倉道」の舊址などにも「右からすだ道、北かまくら道、左高くら道」[1]と漸く讀み判じられる石製の古い示道標が遺つてゐるし、その他の地方にも往々同じやうな示道標が見出されるといふ。

「註」(1) この點に就いては拙稿「上總地方に於ける鎌倉街道の遺趾」（「道路の改良」一六ノ六）に詳しく述べてあるから省略。

まだ、後世などのやうに、多くの部落が沿道に發達せず、茫々とした草原の中を貫いて走るやうな道路が多かつ

た當時に於いては示道標は非常に必要であつたものと思はれる。沿道が斯樣な狀態に在つた頃、示道標は、現代人が考へるよりも遙かに重要なものであつたに相違ないのである。殊に當時の陸奥地方などのやうに廣漠として、果てしなく原、野山が續き人煙の稀れであつた地方に於いては、何かの目標を設けて、旅人に道を示すことが、一入必要であつたものと思はれる。

文治五年奥州藤原氏が頼朝のために討滅せられるまで、奥羽一圓は、鎌倉政權の外に在つて、獨立の政治圏を成してゐた。藤原氏の居館が在つた平泉を中心として、其處には三代（清衡、基衡、秀衡）の積勢の上に築かれた一大王國が存在してゐたのである。隨つて交通も可なり發達し、外濱[1]から白河關（この間が藤原氏の勢圏であつた）まで道路が通じて、陸上交通の大動脈を成してゐた。勿論この道路は、他日上代の道路交通の問題に觸れる機會があれば述べるであらうやうに、藤原氏の頃によつてはじめて開拓せられたものではなかつた。遠い太古に於いて、この地方一圓に住居してゐた先住民族によつて既に自然の道路が形成されてゐたであらう。そして數世紀に亙つて繰り返し行はれた日本民族の蝦夷征服派遣軍によつて、道路も著しく發達して來てゐたであらう。だが、藤原氏の支配下に、殆ど完全なる統一が行はれるやうになつてから、奥羽地方の道路の狀態も一層改良せられてゐたであらう。獨り領内に於いてばかりではなく、京都地方との平和な交通も行はれてゐたし、領内には平和の裡に、農業が發達して人々の往還が繁かつたからである。白河關から外濱までを縱貫する所謂奥州路が、藤原氏領内の主要幹線であつたことは前にも言つた通りであるがこの道路には、特殊な示道標が設けられてゐた。

「註」(1) 外濱といふのは青森灣、野邊地灣の沿岸地方でも指した名稱と思はれる。

「吾妻鏡」が、

先自二白河關一經二于外濱、廿餘箇日行程也。其路一町別立二竪卒都婆一、其面圖二繪金色阿彌陀像一、計二當國中心一、於二山頂上一、立二一基塔一、又寺院中央有二多寶寺一、安二置釋迦多寶

像於左右、其中間開二關路、爲二旅人往還之道一

と記してゐるその「卒都婆」は確かに、示道標として設けられたものと思はれる。卽ち白河關（福島縣の南端）から外濱（青森縣北部地方）まで約二十餘日の行程に當る道路に、一町毎に笠附きの卒都婆を樹て、其面には金色の阿彌陀像が描かれてゐた。そしてその道路の中間頃に當る山頂に一基塔を建立し、又、多寶寺といふ寺を中央にして其左右に釋迦多寶像を安置し、その中央を開いて、往還の旅人等を調べる關としたといふのである。奥州藤原氏は三代共に宗教心が强く、多くの寺院なども建立してゐるから、それ等の特異な卒都婆にも、宗教的意味も否まれてゐるであらう。然し一面またそれと關聯して旅人の難儀を除かうとする意圖の下に、示道標としての割役を以つて施設せられたであらう。

當時の道路及び沿道の狀態から、斯種の施設が如何に必要であつたかは「東關紀行」の記者が東海道、赤坂の宿を過ぎ、本野が原（三河國）について記してゐるところを讀めば、よく肯かれるであらう。

本野が原にうち出でたれば、よもの望みかすかにして、山なく岡なし、秦甸の一千餘里を見わたしたらんこゝちして、草土ともに蒼茫たり。月の夜の望いかならんとゆかしくおぼゆ。茂れるさゝ原の中に、あまたふみわけたる道ありて、行末もまよひぬべきに、故武藏の前司、道のたよりの輩に仰せて、植えおかれたる柳も、いまだ陰とたのむまではなけれども、かつ〳〵まづ道のしるべとなれるもあはれなり。

本野原は、現在の豐橋の西北邊に當る（吉田東伍氏「大日本讀史地圖」に據る）と思はれるが、當時其の地形が、如何に旅人をして道に蹈み迷はせる懼があつたかは、右の記述によつてまざ〳〵と想見せられよう。そうした廣漠として、山も岡も遠く、「四方の望みかすか」な大草原を、自然の道は幾筋にも分岐しつゝ走つてゐたのだ。

優れた民政家であつた泰時が、附近に領地を有つた地頭等にでも命じて、示道の標として柳を植えさせて置いたので、この旅人も非常にたすかつたと云つてゐる。確かに泰

時のやりそうなことである。「東關紀行」の記者がこの邊りを通つたのは仁治三年八月十幾日かのことで、泰時が死んでから間もない頃であつた。その柳が植えられたのは、まだ遠からぬ以前であつたものと見え、成長の速い柳でさへ、まだ陽光をさへぎるほどには成長せず、僅かに道の行手を示す程度であつたといふ。この日記の記者は、續いて泰時の遺德を讃え、

此の召公（周の武王の弟で仁君であつたといふ）の跡を追ひて、人をはぐくみ、物を憐れむあまり、道のほとりの往還の陰までも思ひよりて植えおかれたる柳なれば、これを見む輩、皆かの召公を忍びけん國の民のごとくに惜しみそだてゝ行くすゑのかげとたのまむことその本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ。

と記してゐる。泰時の死んだのは六十の歳で、

事しげき世の習ひこそ物うけれ
花の散るらん春も知られず

の一首がある。彼は正しき、良き民政家であつた。承久の亂に當つて、軍を率ゐて上洛することも痛たく彼の心を苦しめたのであつた。

それは兎も角、鎌倉時代にも、既に斯うした道路交通上の施設があつたのである。そしてそれは恐らくは奈良朝の往時から貢物を運搬する脚夫等のために、路邊に植樹せられた。事蹟などから學ばれた交通施設であつたらう。

紅　雪

一村和を得たり山は眠りけり
鳴動の靜まる久し山眠る
鵑啼く夜半に重たき借蒲團
港の日の明るき窓や冬の海
活け花の亂れて幾日冬座敷